被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード 縁

教訓が、いのちを救う。

3.11 DENSHO ROAD

2023 vol.8

線路とホーム 遺構として保存
東松島市震災復興伝承館

宮古観光文化交流協会「学ぶ防災ガイド」の元田さん
福島県立船引高等学校
復興祈念公園
「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」の川村さん
協働と共助の精神を広める 久慈市
いわき・ら・ら・ミュウ
道の駅 上品の郷



八戸市みなと体験学習館（愛称・みなっ知）

発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構



旧野蒜駅などの施設を活用した東松島市震災復興伝承館

線路とホーム 遺構として保存

東松島市震災復興伝承館

東松島市東日本大震災復興祈念公園は、津波の甚大な被災地となった同市野蒜地区にあります。公園の中核施設で、2016年10月にオープンした東松島市震災復興伝承館は、この夏来館者20万人を達成しました。館内では野蒜地区をはじめ市内の被災状況や復興の姿を紹介。震災遺構としてアスファルトが剥がれたプラットホームや、ぐにゃりと曲がった線路なども残り、地震と津波の威力を物語っています。

伝承館は2階建て。津波が直撃したJR仙石線の旧野蒜駅と奥松島観光情報センターを合築した施設を活用しています。津波は1階天井近くの最大3・7㍍の高さで施設を突き抜け、ホームに設置されていた電柱を押し倒し、駅名標も曲がるなど、威力の痕跡が今もはっきりと残っています。

津波に先立つ地震発生直前、この駅では上り列車と下り列車が発車したばかりでした。駅構内にいた利用者は屋上に避難し、発車直後の列車はどちらも緊急停車。上り列車は乗客・乗員が野蒜小学校に避難した後、津波で脱線・大破。山の切り通し区間の頂上部に停車した下り列車は乗客・乗員が車内にとどまりました。

このように野蒜駅とその周辺では震災直後、地区住民はもちろん、列車の乗客・乗員も緊迫した状況が続いたのです。このような経緯もあり、鉄道関係者が施設の被害や避難誘導の在り方などを学ぶ場として来館するほか、鉄道ファンの姿も見掛けます。

20年にリニューアル

伝承館オープンから1年1カ月後に、震災復興モニュメントなどが立つ広場を含む公園全体がオープン。2020年10月には伝承館内をリニューアルしました。

1階の正面玄関から左の部屋に入ると、パネルがずらりと掲げられ、東松島市の復興の記録を時系列と、「産業」「住まい」など分野別で紹介しています。野蒜地区の高台移設などに伴う2015年5月の仙石線全線開通など、着実に復興が進んできた足跡が一目で分かります。

2階に上がるとすぐ目に付くのが、旧野蒜駅で使われていて津波で壊れた自動券売機。震災発生直後の午後2時48分を指した状態で止まっている大きな時計は野蒜小学校体育館に設置されていたもの。「その時計の針は、人々の生活を一変させた瞬間を指し続ける」というメッセージが、ずしりと響きます。

また、震災時の市内の被害の様子を地区ごとにパネル展示しているほか、津波襲来時の様子や市民の避難行動などをまとめた記録映像をスクリーンで上映しています。

開館は午前9時～午後5時で第3水曜休み。入館無料。



所在地／東松島市野蒜字北余景56-36
TEL0225-86-2985

子どもたちにこそ伝えたい

東松島市震災復興伝承館スタッフの皆さん

東松島市震災復興伝承館のリニューアルに併せ、地方自治法により全国から派遣された職員346人の名板が設置されました。

名板を見渡しながら、伝承館所長を兼務する東松島市復興政策課課長補佐の木村薫さんは「派遣職員やボランティアの方々など、全国から多くの支援をいただいた。震災ではなくすものがたくさんありましたが、新たなつながりなど生まれるものも多く、これからも大切にしていきたい」と語ります。

伝承館は東松島観光物産公社の常勤スタッフ5人で、2人ずつのシフトで勤務しています。スタッフの小林さんは「パネルやモニターで被災当時の様子をぜひ見てほしい。この地域を襲った震災の威力がよく分かります」と呼び掛けます。

取材日には秋田県の山間部にある小学校の6年生が団体で見学に訪れていました。1階の天井近くに引かれた津波の高さを示す赤い線や、大きな「青い鯉のぼり」、暗室で幻想的に輝くアート作品「千分の一羽鶴東松島2020」などを興味深く見学していました。

青い鯉のぼりは震災で亡くなった子どもたちのために、市内で行われている鎮魂プロジェクトを紹介しようと掲示。千分の一羽鶴は震災後に全国から寄せられた折り鶴と、「感謝」「希望」の思いを込めて新たに作った折り鶴を使ったアート作品。震災を経験していない世代にも感謝や希望といった思いを知ってもらおうとの願いが込められています。



左から前列が菊地さんと木村さん、後列が八木さん、小林さん、高橋さん、佐藤さん

12年過ぎ遺族も来館

同館ではこれまでも児童・生徒の見学を多く受け入れてきました。「子どもさんの集中力が欠けないよう、めりはりを付けた案内を心掛け、物より命、まずは逃げてと強調しています」とスタッフの佐藤さん。八木さんは「さまざまな地域から見学に訪れますが、自分がここに来たら何を見たいか、知りたいかを考えながら案内したい」と話します。

「震災遺族は当時を思い出させるような施設に来づらいのでは」とスタッフは推察します。震災から12年が過ぎ、ようやく施設に足を踏み入れた遺族もいるそうです。スタッフの高橋さんは「震災で私たち大人は、子どもが犠牲になったのが最も悲しかった。自分の命を守る行動の大切を常に呼び掛けていきたいですね」と強調します。

東松島市では他の被災地と同様、語り部の高齢化が進んでいます。「若い世代、特に震災を知らない世代に伝えていく取り組みを考えなければならない」と木村さん。

震災時に小学5年生だった復興政策課主事の菊地菜都美さんは「私たちが震災のことを記憶するぎりぎりの世代。下の年齢になるほど記憶が薄くなります。被災地の学校に限らず震災や防災の学習・研修はずっと続けてほしいし、そのような場に伝承館を活用してほしい」とアピールします。



東松島市の震災直後の様子を写真パネルなどで紹介する2階展示室


折れ曲がった電柱や変形した線路が残る旧野蒜駅のプラットホーム

震災の脅威、命の尊さを考える

宮古観光文化交流協会「学ぶ防災ガイド」の元田さん

宮古観光文化交流協会が実施している「学ぶ防災ガイド」は東日本大震災の翌2012年4月にスタートしました。津波被害が甚大だった宮古市田老地区を拠点に、震災当時の様子や被害状況、復興整備を終えた現状を説明。元田久美子さんはガイドの一人として、初年から震災の恐ろしさや命の大切さを伝えています。



津波遺構たろう観光ホテルの6階に立つ元田久美子さん。以前は観光バスのガイドをしていました

復興整備による田老地区の町づくりとともに、学ぶ防災ガイドも内容を変えて実施しています。現在のガイドのコースは2種。所要30分～1時間程度の「通常コース」は防潮堤や「津波遺構たろう観光ホテル」を見学。津波遺構ではたろう観光ホテルの社長が撮影した津波の映像を、実際の撮影場所の6階で視聴できます。

それに避難道を歩く、三王岩を巡るなどのオプションを加えた「震災学習・防災エコツアー体験コース」は90分～2時間程度と、より学びを深められます。

元田さんはガイドを始めた頃、「活動は1、2年で終了する」と思っていたそうですが、近年は定着を実感。参加者はコロナ禍で激減しましたが、今は来年度の予約も入り、特に教育旅行が増えています。

他人事ではなく自分事に

元田さんは震災時、遊覧船や観光バスを運営する会社の観光事業部に所属し、景勝地「浄土ケ浜」を巡る遊覧船の受け付けをしていました。地震後、職員や観光客と高台の駐車場に避難。「海の底が見え、大津波が押し寄せてきました」と振り返ります。観光業の再開は見通しが立たず、3月31日に元田さんら職員は解雇になりました。

浄土ケ浜の近くにあった自宅にも津波が押し寄せました。義母は避難中、津波に飲み込まれ行方不明に。ほんの少しの差で難を逃れた義父は気分が沈みがちになり、仮設住宅で暮らしている最中に他界しました。

そんな元田さんにガイドの打診があったのは震災翌年の3月。義母の遺体は見つからず、義父が亡くなって間もないため、度々の誘いを断りました。しかし義父が生前、昭和三陸地震津波の経験談を語り「また大きな津波が来る」と注意を促していた姿が頭をよぎり、「東日本大震災も誰かが伝えなければ」と引き受けました。

同じ宮古市でも浄土ケ浜と田老は車で約20分の距離。震災直後の田老地区の様子は、田老在住者に教えてもらいました。

「震災を知らない世代が増えています。他人事ではなく自分事として考えるきっかけになるよう、私たちも一緒に学び続けます」


津波遺構たろう観光ホテルは予約者のみ内部見学できます


学ぶ防災ガイドの窓口がある「道の駅たろう」の観光案内所「たろう潮里ステーション」



所在地／宮古市田老2-5-1　道の駅たろう内
TEL0193-77-3305



これまでの活動をまとめた掲示物の前に立つ、岡田さん（左）と浦山さん。プロジェクトへの参加は任意で現在は3年生が卒業し1、2年生約25人が活動しています

震災伝承と地域防災を探究

福島県立船引高等学校

東日本大震災への理解を深め、地域の防災について考え発信する「船高アクティブリーダー育成プロジェクト」に取り組む福島県立船引高等学校（亀田光弘校長）。2021年には県教委が採択する「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部事業」の実践校となり、活動はさらに広がりを見せています。

田村市は福島第一原発事故の影響で半径20キロ圏内にある一部区域に避難指示が出されました。その経緯を踏まえ、同市唯一の高校である船引高校は、地区住民との交流などを通して、震災に対する知識を深め、地域のリーダーとしての力を育む「船高アクティブリーダー育成プロジェクト」の活動に2017年から取り組んできました。

一昨年からは「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部事業」の実践校となり、「震災を伝える」をテーマに研修なども行っています。富岡町の「東京電力廃炉資料館」を昨年初めて訪れた、3年生の岡田香央里さんは、「廃炉へ向けた職員の方々の思いを知ることができました。町の復興は確実に進んでいましたが、震災当時のまま残された場所もあり心が痛みました」と話します。

語り部交流会に参加

コロナ禍で対面での活動が制限される中、昨年は地域住民らと共に田村市主催の避難所宿泊体験に参加。段ボールベッドやテントを組み立てたり、各グループに分かれて避難所のレイアウトを考えたりしました。3年生の浦山心さんは「通路や寝る場所をどのように配置するかなど、メンバー内でさまざまな意見が出ました。避難所を円滑に運営していくには協力が不可欠。日頃のつながりが大切だと感じました」と振り返ります。

文化祭では「地域の防災」をテーマにこれまでの活動をパネルで紹介した他、家庭でできる対策を分かりやすく記した「防災ファイル」を作成し来場者に配布。大きな反響がありました。

今年1月に開かれた県教委主催の「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部交流会」には、岡田さんと浦山さんの2人も参加し、震災伝承や復興について学ぶ県内の高校生に向けて、オンラインで活動の成果を発表しました。岡田さんは「他校の発表は大きな刺激になりました。卒業後も防災の重要性や震災について伝えていきたいと思います」と力を込めます。



2班に分かれて東日本大震災・原子力災害伝承館や東京電力廃炉資料館、Jヴィレッジを見学。語り部の講話や原発事故について話を聞き、震災への知識を深めました

追悼と鎮魂、記憶・教訓の伝承の場

「復興祈念公園」



東日本大震災で被災した宮城・岩手・福島3県で「祈り」と「伝承」「復興」の場として整備されているのが「復興祈念公園」です。宮城県では2021年3月に石巻南浜津波復興祈念公園が、岩手県でも同年4月に高田松原津波復興祈念公園が開園。福島県浪江町・双葉町では25年の開園を目指して建設が進められ、一部がすでに公開されています。

復興祈念公園は東日本大震災による犠牲者への追悼と鎮魂、震災の記憶と教訓の後世への伝承、復興の発信を目的にした複合施設。伝承や復興に関する施設を主に県や市が、追悼と鎮魂を司る空間を主に国が担ってきました。

「自然災害の被災地に国の追悼・祈念施設を造ることは、前例のないミッションでした」と振り返るのは、国土交通省東北国営公園事務所所長の澤田大介さん。

「祈り」や「伝承」の空間の国内のモデルとして、広島、長崎両市の平和公園や千鳥ヶ淵戦没者墓苑（千代田区）、人と防災未来センター（神戸市）や、東遊園地（同）で行われている「阪神淡路大震災1・17のつどい」といった追悼行事も参考にしながら、各県それぞれの建設地にふさわしい空間を有識者、地元住民らとともに模索していったと言います。

土地の特性を尊重

整備の目的は共通しているものの、復興祈念公園それぞれの基本理念やデザインコンセプトは、立地する土地の背景や特性によって異なります。

高田松原津波復興祈念公園が整備された場所は、もともと住宅地ではなく名勝「高田松原」や旧道の駅「タピック45」があった観光地でした。追悼と鎮魂の空間にふさわしい祈りの場をしつらえながら新しい「道の駅高田松原」が併設され、現在は地域の復興・振興の拠点として多くの来訪者を集めています。

一方、石巻南浜津波復興祈念公園は地震と津波、火災によって500人以上が犠牲になり、防災集団移転を余儀なくされた住宅地の跡地に造られています。このため地域住民の意見を踏まえ追悼と伝承の場としての役割が重視されました。市街化される以前の湿地や松林を復元しつつ、かつての主要道路を園路として形を残したり、住民らに親しまれた施設跡を遺構として保存したりと「土地の履歴」や「街の記憶」を後世に残す工夫を凝らしました。

浪江町・双葉町に新公園

福島県復興祈念公園の建設が進む中野地区、両竹地区は津波被害のみならず、震災直後に原子力災害で住民たちが避難を余儀なくされ、10年以上戻ってくることができなかった複合災害の被災地域です。

どんな公園がふさわしいのか、地元出身の有識者や浪江・双葉両町長の意見も踏まえて議論が重ねられ、被災直後の状況を残したり住居跡を盛土で表現したりと、かつての暮らしの様子を後世に残すための検討も進められています。

公園に隣接するのが福島県の「東日本大震災・原子力災害伝承館」。澤田さんは「県の伝承館で複合災害について学び、その後公園で実際どういう被害があったかを現地で実感し、祈りを捧げていただけるような場となるよう意識しました。将来の時代の流れや地域の状況の変化、その時々のニーズに応じて公園の役割が変わっていく可能性も視野に入れて計画を進めていきます」と説明します。

公園の中心に位置する「追悼と鎮魂の丘」は、丘の上から津波が襲来した海や被災した集落跡等を望み、震災で犠牲となったすべて生命を悼む場となるとともに、丘の内部に埋設された特徴的な建築が設けられます。この建築では、入口は日常を感じさせる温かみのある空間ですが、奥へ進むと東日本大震災発生時を思わせる空間に転換し、震災直後から徐々に復旧・復興が進むという時間軸の流れを感じ、思いを馳せることができるような雰囲気の空間を設ける計画となっています。その後、屋外の一筋の光を見据えながら出口へと向かい、屋外の現実の世界に到達したところに献花広場があり、祈りを捧げるというストーリー性のある構成が計画されています。「3・11からそれ以降の復興に向けた一通りの流れを体感してもらえるような空間とし、思いを寄せて祈りを捧げていただける場を考えています」と澤田さん。

震災遺構と連携

ことし6月、天皇、皇后両陛下が出席された「全国植樹祭いわて2023」会場として高

全国植樹祭会場として注目集まる
岩手・宮城・福島の復興のシンボル

高田松原津波復興祈念公園



陸前高田市気仙町字土手影180
TEL0192-22-8911
https://takatamatsubara-park.com/



「奇跡の一本松が残ったこの場所で、犠牲者への追悼と鎮魂の思いとともに、震災の教訓とそこからの復興の姿を高田松原の再生と重ね合わせ未来に伝えていく」が基本理念。復興のシンボルをモニュメントとして保存した「奇跡の一本松」や道の駅高田松原、震災遺構タピック45、追悼の広場、震災被災者と同数の明かりを灯す「大屋根のファサード」などを整備しています。

石巻南浜津波復興祈念公園



石巻市南浜町2-1-56
TEL0225-98-7401
https://ishinomakiminamihama-park.jp/



「東日本大震災により犠牲となったすべての生命（いのち）への追悼と鎮魂の思いとともに、まちと震災の記憶をつたえ、生命のいとなみの杜をつくり、人の絆をつむぐ」が基本理念。初代「がんばろう!石巻」看板跡やみやぎ東日本大震災津波伝承館、追悼の広場、石巻市慰霊碑、かつての地名を冠した多目的広場が整備されるとともに松原なども復元しています。

福島県復興祈念公園



福島県浪江町大字両竹地内
問／国土交通省 東北地方整備局 東北国営公園事務所
TEL0224-84-6211



「生命（いのち）をいたみ、事実をつたえ、縁（よすが）をつなぎ、息吹よみがえる」が基本理念。「追悼と鎮魂の丘」などの整備が進められています。2021年から平日の9:00～16:00限定で見晴台の利用が始まり、浪江町・双葉町を襲った最大津波高さを示す標示柱なども公開されています。



田松原津波復興祈念公園が利用されるなど、復興祈念公園は各県の復興のシンボルとしても注目を集めています。

石巻南浜津波復興祈念公園の周辺には「石巻市震災遺構門脇小学校」や「伝承交流施設MEET門脇」「がんばろう！石巻看板」「東日本大震災メモリアル 南浜つなぐ館」が点在、また高田松原津波復興祈念公園の園内には「タピック45（旧道の駅高田松原）」や「東日本大震災津波伝承館（いわてTSUNAMIメモリアル）」が整備され、福島県復興祈念公園の近くには「震災遺構浪江町立請戸小学校」もあります。

澤田さんは「公園単独ではなく、関連する震災遺構と連携することで、震災の事実と教訓の理解が深まり、より効果的な伝承につながると思います」と期待しています。

記憶のない世代に命を守る知識を

「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」の川村さん

かつて「仙台市内で海に最も近い小学校」だった仙台市立荒浜小学校は、学校施設として震災後初めて公開された震災遺構です。津波は海岸から700メートル離れた校舎2階にまで達しましたが、同校に避難した児童、教員、住民ら320人全員が助かりました。当時校長だった川村孝男さんは自身の経験・教訓とともに、震災前の荒浜地区の豊かな自然と暮らしの思い出を伝えています。



2010年春に校長として着任した川村さんは学校関係者らと共に「地震発生時は屋上」と避難時のルールを統一し、避難所運営ゲームHUG（ハグ）を経験。こうした備えが、発災時に役立ちました

津波の痕跡が鮮明に保存された遺構に職員として務め、見学者を案内してきた川村さん。

卒業式を1週間後に控えた11年3月11日、地震発生の直前まで子どもたちが遊んでいた校庭の遊具やイチョウの木、そして子どもたちが暮らす家々が津波にのみ込まれていった光景を「現実とは思えませんでした」と、振り返ります。

当時の荒浜地区は住宅地であり、高い建物は小学校しかありませんでした。「小学校にたどり着けたかどうかが生命線。自宅にいた方、自宅に戻った方、校庭にいた方。荒浜地区で192人が犠牲になりました」。

停電で情報の収集も発信もできない孤立した状況下、屋上からヘリコプターによる救助活動が行われましたが、1度に4・5人ずつしか乗れないため児童71人だけで11時間半もの時間を要し、川村さんは「最後の6年生が助かった瞬間、ほっとしました」と語ります。

児童にも分かりやすく

被災直後の様子を紹介する展示は2023年にリニューアルされ、当時小学生だった卒業生や川村さんら元教員が自らの経験を語る映像をはじめ、小学生向けに分かりやすい解説を加えた資料が充実しました。

「当時の記憶のない子どもたちにとって震災は昔の出来事。一方、線状降水帯による豪雨など自然災害は多様化し、より激しくなっている今、『昔、遠い街で怖い出来事があった』と伝えるのではなく、津波のこない地域の子どもたちも『自分の住むまちで今、どう命を守っていくか』考えられるきっかけを作りたい」と、川村さん。

震災後の学校防災講話では当時の児童や住民たちのつらい経験の伝承に力を入れていましたが、それだけでは「荒浜は怖い場所」というイメージが先行してしまう、と意識を転換。地域の魅力の発信にも心を砕くようになりました。「荒浜はつらい思い出だけの場所ではありません。かつて海水浴場として親しまれた荒浜が、自然の良さを感じられる憩いの場に、いつか戻ってほしいと願っています」。



新しい展示には、小学生たちが「自分で調べて気付く」学習の工夫が凝らされています



所在地／仙台市若林区荒浜字新堀端32-1
TEL022-355-8517

海溝型地震への備え重要

協働と共助の精神を広める 久慈市

東日本大震災後、NHK連続テレビ小説の舞台となり、北三陸の観光拠点として一躍脚光を浴びた久慈市。一方で震災からの12年は、津波被害の復興途上に2度の台風直撃に遭うなど、災害と向き合う歳月でした。将来起きることが予想される日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震に備えるためにも、市民挙げての防災と震災伝承の意識の広がりが何よりも重要です。



お話を伺った方
遠藤譲一市長



台風災害からの復旧作業で実感した「共助」の力

東日本大震災で、久慈市は久慈港で最大8・6メートルの津波を観測。一方、死者4人、行方不明者2人で人的被害が比較的少なかったのが救いとなりました。その要因を遠藤譲一市長は「震源に近い岩手県南部に比べて津波到達まで時間があり、高台に避難できたことが大きい」と分析します。

久慈市は明治、昭和の三陸地震津波なども経験。時の経過とともに風化しやすいとはいえ、こうした歴史が市民の避難行動につながったようです。避難することこそが命を守るために重要であることを示した事例となりました。

遠藤市長は本格的な復興が始まった2014年3月に就任し、現在3期目。「就任当初から市民との対話を心掛けてきた。もっと市民の声をよく聴かないと、という思いでしたね」と振り返ります。被災施設や道路の整備はもちろん、新たに設けた避難道路や防災センターなどの有効活用のため、住民と対話を重ねて防災意識の高揚を図り、協働への理解も促してきました。



震災からの復興、防災について学ぶことができる「あーすぴあ」

2016年と19年の2度にわたり、久慈市は台風直撃の被害を受けました。市中心部がどろに埋まったり、災害ごみの処理に追われたりと、震災復興のめどが見えてきた時期の度重なる台風被害に遭いましたが、「市内外からのボランティアの皆さんに助けられた」と感謝するとともに、共助の重要性をさらに実感したとのこと。

交流人口拡大に期待

震災や台風の経験に加え、日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震での被害想定が示されたことで、市民の防災意識は着実に高まっています。被害を少なくするには、自助・共助・公助が必要不可欠です。津波からの減災効果が期待されている久慈港湾口防波堤について、「海溝型地震へ備えるため、一日も早い完成を国や県に強く要望する」と遠藤市長。

共助の促進のため、市内の自主防災組織結成率100％達成に向け、町内会などと意見交換を進めるほか、防災士の養成にも取り組んでいます。共助の力を高めるため、地域や家庭、学校で防災について話し合う機会を設けたり、避難訓練を行うことで、度重なる災害の風化を防ぎ、震災を経験しない子どもたちへ伝承していきます。

震災で全壊し、復興のシンボルとして復活した久慈地下水族科学館「もぐらんぴあ」。館内の防災展示室「あーすぴあ」は震災復興の状況や防災知識を学ぶことができ、国土交通省の震災伝承施設（第3分類）に指定されています。

三陸沿岸道路が一昨年12月、全線開通し、今年4月には、久慈北インターチェンジそばに、久慈広域4市町村が共同で設置した道の駅「いわて北三陸」がオープン。北三陸の玄関口として、もぐらんぴあや北限の海女などの既存の地域資源と連動して、地域の交流人口の拡大を図る考えです。

震災伝承施設を併設
職員が被災体験語る

いわき・ら・ら・ミュウ

福島県最大規模の港湾「小名浜港」の一角にある「いわき・ら・ら・ミュウ」は、東日本大震災の津波で1階の天井部分まで浸水し、大量のがれきが流れ着きました。施設2階の「3・11いわきの東日本大震災展」では、職員が撮影した津波襲来時の写真などを展示しており、当時の状況を知ることができます。



1階の海鮮市場通りには、福島県沖で取れる「常磐もの」をはじめ、全国で水揚げされた新鮮な魚介類が並びます

小名浜港で水揚げされた新鮮な魚介類を目当てに、県内外から年間100万人余りが訪れる「いわき・ら・ら・ミュウ」。震災が起きた時は、平日の夕方に差し掛かる時間帯で来店客も少なく、人的被害はありませんでした。

同施設を運営するいわき市観光物産センター営業課課長補佐の高田和則さんは、「お客さまを安全な場所に誘導した直後、津波が到達したため職員10人ほどと2階に避難し、ラジオを聞いて一晩を過ごしました」と話します。朝になり水が引いた1階に下りると、押し流された車やがれき、生きた魚などが散乱していて呆然としたといいます。

高田さんも福島第一原発事故の影響で自主避難しましたが、4月には自宅に戻り、地元にとどまった職員やテナントの従業員らと共に、再開に向けた復旧作業を始めました。前橋の市役所職員や青年会議所のメンバーなど、約300人のボランティアも駆け付けました。「重機はなく泥のかき出しやがれき撤去など全てが手作業。私たちだけでは到底無理でした」と協力に感謝します。



「3・11いわきの東日本大震災展」は入場無料。2019年に震災伝承施設の第3分類に登録されました

11月25日の再オープン当日には再開を待ち望んだ市民が開店前から長蛇の列を作りました。「ら・ら・ミュウが復活すれば、地元が元気になると思い頑張ってきたので、本当にうれしかった」と振り返ります。

自ら撮影した写真を公開

施設2階の「3・11いわきの東日本大震災展」は2013年2月に開設。震災直後の小名浜港周辺の様子や復興までの過程を写真や映像、パネルなどで紹介しています。「その頃はまだ、震災を伝える施設が福島にはほぼありませんでした。自分たちが経験したことを忘れず、子どもたちに伝えていくため、撮影した写真や映像を公開することにしました」。

予約制で職員による20分ほどの語り部講話も開設当初から行っています。需要は減ってきているものの、教育旅行の一環などで今も県内外から問い合わせがあり、震災の風化を防ぐため今後も継続していく予定です。

高田さんは、津波に飲まれて船が沈んでいく光景を目の当たりにしました。「水が引いてしばらくすると、今度はものすごい勢いで波が押し寄せてきた時の恐怖は忘れられません。思い出したくない記憶ですが、経験した一人として、これからも語り継いでいきたいと思います」と力を込めます。



小名浜地区の被災状況や復興への歩みをパネルや映像で紹介する

※第3分類（訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解しやすさに配慮している施設）のみ掲載

- **アクアマリンふくしま** いわき市小名浜字辰巳町50
- **いわき市ライブいわきミュウじあむ「3.11いわきの東日本大震災展」** いわき市小名浜字辰巳町43-1
- **いわき市地域防災交流センター 久之浜・大久ふれあい館** いわき市久之浜町久之浜字中町32
- **いわき震災伝承みらい館** いわき市薄磯3-11



所在地／いわき市小名浜字辰巳町43-1
TEL0246-92-3701

震災経験から防災機能強化
大川地区の惨状も発信

道の駅 上品の郷

三陸自動車道河北インターチェンジのほど近く、国道45号沿いにある道の駅「上品の郷」は温泉保養施設、足湯、飲食施設、農産物直売所を併設し、ドライバーや観光客、住民が多く訪れる憩いの場。東日本大震災では津波被害がなく、営業を継続。食料や物資不足が続く石巻の人々の生活を支え、情報基地にもなりました。



大川地区に関する震災伝承コーナーを案内する三浦さん

2011年3月11日は地元テレビ局による生中継が予定されていましたが、中継前に大地震が発生。その直後に「災害報道に向かうため、生中継は中止」と連絡が入りました。

上品の郷は停電と断水になり、ポータブル型発電装置を用いて営業。総務部の三浦結美子さんは「飲食物やろうそく、乾電池などを買いに、近所の方や避難者がいらっしゃいました」と振り返ります。

数日営業を続けていると「新北上大橋が落ちたかもしれない」「石巻市役所の1階まで水が来ているらしい」など情報が錯綜。被害状況を把握できないまま、三浦さんらスタッフは不安を抱えながら客の対応を続けました。

停電と断水は復旧の見込みがなく、ガソリンなどの燃料、商品も尽きてきました。発電装置は数日で切れ、安否の分からないスタッフ、家族の行方が分からないスタッフもいます。「営業を続けていいのか」という声も出始めました。しかし、「食べられるものなら何でもいいから売って」と次々と客が訪れ、屋外で販売することに。当時の駅長自ら、近所の農家を訪ね回り、野菜などの提供を呼び掛けました。


近隣の農水産物や加工品に加え、上品の郷オリジナル商品も並びます

電話やメールができない状況が続き、出入り口に「○○は無事です」「○○に避難しています」など安否を知らせる手書きのメッセージが増えていきました。

3月24日に水道が復旧し、温泉保養施設は営業を再開。被災して自宅での入浴が困難だったり、避難所に身を寄せたりしている市民の癒やしの場になりました。

敷地に震災伝承コーナー

2013年に石巻市と災害時支援協定を締結。当時、道の駅が地元の行政と協定を締結するのは全国初の試みです。避難所の機能はありませんが、安全を確認でき次第、災害の支援に当たります。災害対策用車両を停車できる場所を確保し、受水槽や非常用発電機も新たに設置しました。

▼石巻市に合併前、河北町だった2004年に開設



上品の郷から「石巻市震災遺構大川小学校」までは車で20分弱。敷地にある交通情報案内所には「震災伝承コーナー」を設け、震災前の大川小とその周辺の様子、震災直後の大川小児童の行動記録、震災による被害状況などを展示しています。震災遺構大川小学校も紹介。これらの展示は伝承団体「大川伝承の会」が担当し、内容は随時更新しています。



所在地／石巻市小船越二子北下1-1
TEL0225-62-3670

石巻市・いわき市の震災伝承施設

- **石巻ニューゼ**　石巻市中央2-8-2 A棟1B
- **伝承交流施設 MEET門脇**　石巻市門脇町5-1-1
- **東日本大震災メモリアル南浜つなぐ館**　石巻市南浜町3-1-24
- **石巻南浜津波復興祈念公園**　石巻市南浜町1丁目地内外
- **石巻市震災遺構大川小学校**　石巻市釜谷字韮島94
- **東日本大震災慰霊碑（日和幼稚園被災園児慰霊碑）**　石巻市門脇町5-242
- **石巻市震災遺構門脇小学校**　石巻市門脇町4-3-15
- **がんばろう！石巻看板**　石巻市南浜3丁目地内（石巻南浜津波復興祈念公園内）

Topics & Information

令和5年度 防災・伝承セミナー in青森を開催します

当機構では、被災地にある震災伝承施設のネットワーク化を推進し、地域の防災力の強化や地域を越えた交流促進を目的として「3.11伝承ロード」の取り組みを推進しています。その一環として震災伝承の周知と啓発、防災力の向上への貢献のために防災・伝承セミナーを開催するものです。

本年度は10月26日㈭13:30から「震災伝承と観光」をテーマに八戸市公民館で開催しますので、ぜひご参加をお待ちしております。

10月26日㈭ 13:30から

会　場　八戸市公民館（八戸市公会堂文化ホール）

WEB　オンライン配信あり ※YouTubeライブ配信

定　員　会場200人、オンライン300人
※定員になり次第、締め切ります

参加費　無料

締め切り　10月18日㈬
※10月19日㈭に聴講用URLを送信します

参加申し込み　WEBサイト 申し込みフォーム→
https://www.311densho.or.jp

問／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構
TEL022-393-4261　FAX022-393-4271

時　間	プログラム
13:30	**開会あいさつ** 青森県知事　宮下宗一郎氏
13:35	**基調講演** テーマ「災害を100年後に伝える」 弘前大学教授　片岡俊一氏（地震工学）
14:30	**パネルディスカッション** テーマ「震災伝承と観光」について ～震災伝承施設に求められる役割と震災伝承の活性化について～ ▷コーディネーター 東京大学公共政策大学院特任准教授 三重野真代氏 ▷パネリスト 八戸市長 熊谷雄一氏 八戸市みなと体験学習館館長 前澤時廣氏 ㈱ACプロモート代表取締役 町田直子氏 ㈠財）3.11伝承ロード推進機構業務執行理事 原田吉信氏 ▷アドバイザー 弘前大学教授 片岡俊一氏
15:30	**閉会**



昨年の防災・伝承セミナー（宮古市）

表紙

被災地を歩く

津波避難の高台に立地

八戸市みなと体験学習館（愛称・みなっ知）（八戸市）

八戸市の新井田川河口の高台に位置する館鼻公園は、眼下に八戸港を望み、「グレットタワーみなと」（高さ24.2㍍）や憩いの場としても親しまれている休憩所、地形を生かした見晴らし台や季節ごとの花々が楽しめる広場がある。

この地にあった旧八戸測候所の2階建ての庁舎は築30年弱で、新たな活用を検討していた矢先に東日本大震災が発生。これを契機に、津波被害を伝え、防災を学習する場とともに、地域の歴史と文化を紹介する施設に改修し、2019年7月に八戸市みなと体験学習館（愛称・みなっ知）としてオープンした。青森県内では唯一となる第3分類の震災伝承施設だ。八戸市内外の多くの小中学校が校外学習で見学に訪れている。

さまざまな展示をコンパクトに分かりやすく紹介しているのが特徴だ。1階受付から入ってすぐの「震災タイムトンネル」は通路を活用し、照明を落とした空間で、震災による大規模な災害の様子を映像と音響で紹介。震災がいかに深刻な被害だったのか目と耳で体感できる。2階にはさまざまな防災食を食べられるカフェコーナーもあり、来館者の興味をそそっている。

館鼻公園は海抜27㍍、新井田川河口から50㍍ほどの場所で、この付近の住民は昔から、津波があればこの高台に避難したという。かつては地震や津波の観測も担った測候所の建物は震災伝承施設に生まれ変わり、来館者に震災の教訓を伝え、災害時の避難の大切さを訴え続けている。



伝承ロード縁　2023年9月11日発行
発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構　編集・制作／株式会社クリエイティヴエーシー

記事を見ての感想、取り上げてほしい話題など、ご意見をお寄せください。　info@311densho.or.jp　FAX022-393-4271

無料